

# 堺環濠都市遺跡出土遺物からみた「高麗茶碗」

永井 正浩

はじめに

高麗茶碗は、朝鮮時代の陶磁器（以下、朝鮮陶磁と呼称）を用いた茶碗の総称で、器表に白土を用いて文様を施す粉青沙器<sup>ふんせいさき</sup>、文様のない施釉陶器である灰青沙器<sup>かいせいさき</sup>、磁器質の胎土で透明釉を掛ける硬質白磁<sup>かうしつはくし</sup>、陶器質の胎土で白濁する釉を掛ける軟質白磁<sup>なんしつはくし</sup>、日本からの注文を受け朝鮮陶磁の技法を用いた注文茶碗などの種類がある。

日本では、一六世紀～一七世紀前半の遺跡から出土する朝鮮陶磁碗のなかに、遺構から茶道具と共に出土することで、茶碗としての用途が特定できたものがある。堺環濠都市遺跡でも蔵と考えられる建物跡から出土した資料で、茶碗と判断できる事例が複数認められる。

堺環濠都市遺跡は、室町時代から現在まで続く都市「堺」の足跡をのこす中世・近世を代表する遺跡で、発掘調査によって遅くとも一四世紀後半には町としての景観が形成されたことを確認している。また、堺を襲った複数回にわたる火災の復興や、建物の建て替えに際して、盛土を施し地盤のかさ上げを行うことが多いことから、各時代の遺構面やそれに伴う陶磁器類が整地層により保護され、良好な状態で残されている。さらに、一五世紀後半から一七世紀初頭の遺構や整地層から出土した陶磁器から、国内外の交易でもたらされた貴重な器を所持する人々の暮らしの一端が明らかとなった。

ところで、遺跡から出土する陶磁器をはじめとした考古資料は、人々が所持した道具が時代を経て出土することにより、歴史の物的証拠として取り扱うことができる。しかし、土中より出土する遺物は、次の点について考慮する必要がある。

遺構や火災層の出土遺物は、共伴する器の組み合わせにより、その用途が推定できる例が認められる。一方でこれらは廃棄や被災等に伴う資料であるため、当時の所持物全てを把握することはできない。例えば、遺構から出土する遺物は、不要もしくは破損したものが対象となり、ほかにも火災層から出土した遺物は、避難の際に貴重品だけは持ち出された可能性がある。

また、遺物の製作年代と、使用後に廃棄された年代には時期差があり、個々の器の使用期間は異なる。遺物の年代については、窯などの生産遺跡の資料や年代の定点となる遺構から出土した遺物の組成と比較することで、個別に検討する必要がある。

本稿では、右記二点を踏まえて、一六世紀から一七世紀初頭の遺跡から出土した高麗茶碗について考察する。

## 1 遺跡出土資料からみた高麗茶碗のはじまり

堺環濠都市遺跡から出土した陶磁器に、茶道具が少なからず含まれていることから、堺の人々が古くから茶をたしなんでいたことがわかる。本遺跡では、一四世紀後半の整地層から瀬戸天目や中国製茶入（本書四二頁 39―2）などが出土し、一五世紀の遺構や整地層からは中国製天目（本書四二頁 39―1）や瀬戸天目、釜、茶白などが出土した。

堺環濠都市遺跡で建物跡から茶道具がまとまって出土した例に、一五世紀後半に建てられ、一六世紀前半に火災で焼失した、第929地点の礎石建物SB615・SB617がある。倉庫と考えられる礎石建物SB615では、中国製茶壺と中国製青磁花入が、茶道具を収めた建物と考えられるSB617